

琉球大学学術リポジトリ

小学校における自己調整学習と学業成績の関連

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2020-10-22 キーワード (Ja): 自己調整学習, 学業成績 キーワード (En): 作成者: 淡野, 将太, 波照間, 永熙, Tanno, Syota, Hateruma, Eiki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/47091

小学校における自己調整学習と学業成績の関連

淡野 将太*・波照間 永熙**

Relationship between Self-regulated Learning and Grade Level in Elementary School

Syota TANNO and Eiki HATERUMA

要約

本研究は、小学校6年生を対象に自己調整学習と学業成績の関連を検討した。その結果、自己調整学習の注意集中方略とながら方略が学業成績と有意な相関を示した。注意集中方略およびながら方略を説明変数、学業成績を目的変数とした重回帰分析を行った結果、注意集中方略は有意な影響力を示した一方、ながら方略は有意な影響力を示さなかった。注意集中を高める自己調整学習の有用性を議論した。

キーワード：自己調整学習、学業成績

目的

自己調整学習 (self-regulated learning) とは、学習者がメタ認知、動機づけ、行動において、自身の学習過程に能動的に関与している学習のことである (Zimmerman, 1986, 1989)。例えば、教科書を読む際に重要なことを読みとろうと配慮しながら読み進める学習行動を指す。

自己調整学習と学業成績の関連を検討する研究がある。例えば、松沼 (2004) は、教育的介入の観点から、小学4年生を対象に、テスト不安、自己効力感、自己調整学習という適性変数とテスト成績の関連を検討した。その結果、自己調整学習のテスト成績に対する直接効果及びテスト不安を介した間接効果は認められなかった。自己調整学習は、主に自己効力感を介してテスト成績に影響を及ぼすことが示唆され、テスト成績を改善するためには自己調整学習の遂行を通じて自己効力感を高める介入方略が有効であることが示唆された。

本研究は、小学6年生を対象に、自己調整学習の2側面を測定し、それらと小学校で用いら

れている学業成績の関連を検討する。伊藤 (2009) は、自己調整学習には認知的側面と動機づけ的側面があることを指摘した。それは、それまでの自己調整学習研究では、主に認知的方略に焦点を当てて研究が進められていたが、自ら動機づけを高めて学習を行う動機づけ的側面もあることを重視したためである。学業成績として、先行研究ではテスト得点を用いているが、本研究では文部科学省が定める小学校の成績を用いる。日本の小学校では、学業成績として「数学的な考え方」、「表現・技能」、「知識・理解」、「関心・意欲・態度」が用いられているため、これらを点数化して関連を検討する。

方法

調査対象者 小学校6年生30名を対象に調査を行った。

手続き 認知的側面の自己調整学習方略 伊藤 (2009) を参考に、小学6年生が回答できるよう表現を変更した認知的側面の自己調整学習方略を測定する18項目を用いた。この方略は「一般的

*琉球大学教育学部

**沖縄スポーツアカデミー株式会社

認知（理解・想起）方略（e.g. 私は、たとえわからなくても、先生の言っていることをいつも理解しようとする。）、「復習・まとめ方略」（e.g. 私は、する必要がなくても、練習問題をする。）、「リハーサル方略」（e.g. 私は、勉強内容を読むとき、おぼえられるように、繰り返し心の中で考える。）、「注意集中方略」（e.g. 私は、授業中、教科書を読んでいるとき、何のことが書かれていたのかわからないことがよくある。）、「関連づけ方略」（e.g. 私は、何かを読んでいるとき、読んでいることと、自分がすでに知っていることを関連づけようとする。）の 5 方略から構成される。評定は「全く当てはまらない」を 1 点、「とてもよく当てはまる」を 6 点とした 6 段階評定法で行った。

動機づけの側面の自己調整学習方略 伊藤 (2009) を参考に、小学 6 年生が回答できるよう表現を変更した動機づけの側面の自己調整学習方略を測定する 30 項目を用いた。この方略は「整理方略」（e.g. 私は、色のついたペンを使ってノートをとったり、教科書に書き込みをする。）、「想像方略」（e.g. 私は、行きたい中学校に受かった時のことを考える。）、「ながら方略」（e.g. 私は、音楽を聴きながら勉強する。）、「負担軽減方略」（e.g. 私は、得意なところや好きなところを多く勉強する。）、「めりはり方略」（e.g. 私は、勉強するとき思いっきり勉強して、遊ぶときは、思いっきり遊ぶ。）、「内容方略」（e.g. 私は、自分のよく知っていることや、興味のあることと関連づけて

勉強する。）、「社会的方略」（e.g. 私は、友達と教え合ったり、問題を出し合ったりする。）、「報酬方略」（e.g. 私は、勉強が終わったり問題ができたなら、お菓子を食べる。）、の 8 方略から構成される。評定は「全く当てはまらない」を 1 点、「とてもよく当てはまる」を 6 点とした 6 段階評定法で行った。

学業成績 学業成績として 1 学期の算数の成績を用いた。「数学的な考え方」、「表現・技能」、「知識・理解」、「関心・意欲・態度」の 4 つの観点について、成績指標である△を 1 点、○を 2 点、◎を 3 点として点数化した。

結果

相関分析 認知的側面の自己調整学習方略、動機づけの側面の自己調整学習、学業成績の相関係数を算出した (Table 1)。その結果、注意集中方略 ($r = -.528, p = .003$) とながら方略 ($r = -.451, p = .012$) が学業成績と有意な相関を示した。

重回帰分析 学業成績と有意な相関を示した注意集中方略とながら方略について、両変数を説明変数、学業成績を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、決定係数は有意であった ($R^2 = .322, p < .01, VIF = 1.36$)。注意集中方略は有意な影響力を示した ($\beta = -.403, p < .05$) 一方、ながら方略は有意な影響力を示さなかった ($\beta = -.243, ns$)。

Table 1 自己調整学習と学業成績の相関関係

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 一般的認知													
2 復習・まとめ	.814 **												
3 リハーサル	.680 **	.808 **											
4 注意集中	.085	.170	.341										
5 関連づけ	.538 **	.572 **	.611 **	.332									
6 整理	.707 **	.757 **	.649 **	.134	.581 **								
7 想像	.209	.313	.422 *	.403 *	.526 **	.278							
8 ながら	-.041	-.076	.241	.516 **	.145	.072	.311						
9 負担軽減	.168	-.058	.108	.447 *	.092	.018	.055	.425 *					
10 めりはり	.193	.027	-.237	-.193	-.021	.150	-.084	-.208	-.073				
11 内容	.488 **	.392 *	.505 **	.358	.497 **	.614 **	.353	.284	.308	-.082			
12 社会的	.648 **	.523 **	.402 *	.316	.339	.503 **	.241	.033	.038	.079	.415 *		
13 報酬	-.158	-.121	.003	.510 **	-.075	-.153	.052	.451 *	.470 **	-.272	-.003	.032	
14 学業成績	.150	.116	-.119	-.528 **	-.127	.019	-.289	-.451 *	-.071	.334	-.336	-.195	-.332

注 ** $p < .01$, * $p < .05$

考察

本研究は、自己調整学習と学業成績の関連を検討した。相関分析では、自己調整学習の注意集中方略とながら方略が学業成績と有意な相関を示した。重回帰分析では、注意集中方略が学業成績に有意な影響力を示した。つまり、「私は、授業中、教科書を読んでいるとき、何のことが書かれていたのかわからないことがよくある。」、「私は、教科書を読むとき、その中の最も大切なことを読みとることが、むずかしい。」、「私は、問題がむずかしいとき、あきらめるか、かんたんのところだけをする」、「私は、先生がしゃべっているとき、他のことを考えて、実際に言っていることを聞いていないということがある」という4項目から構成される注意集中方略の点数の高さ、すなわち、注意集中の程度の低さは、学業成績を低下させる方向に影響していた。このことから、注意集中を高める自己調整学習を児童に内在化させる指導を

行うことで、児童の学業成績を向上させることが可能になると考えられる。

引用文献

- 伊藤 崇達 (2009). 自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割 北大路書房
- 松沼 光泰 (2004). テスト不安, 自己効力感, 自己調整学習及びテストパフォーマンスの関連性 小学校4年生と算数のテストを対象として 教育心理学研究, **52**, 426-436.
- Zimmerman, B. J. (1986). Becoming a self-regulated learner: Which are the key subprocesses? *Contemporary Educational Psychology*, **66**, 115-128.
- Zimmerman, B. J. (1989). A social cognitive view of self-regulated academic learning. *Journal of Educational Psychology*, **81**, 329-339.